東京つれづれ日誌⑭⑧

相磯凌霜と新井鉄工所。

相磯凌霜（本名、勝弥。一八九三―一九八三）。永井荷風の愛読者ならこの人のことをご存じだろう。戦時中から戦後にかけて、荷風がもっとも親しくしていた友人である。文学者ではない。墨田区にある新井鉄工所に関わっていた実業の人。

荷風は文学者との付き合いを嫌った。相磯はいわゆる文壇の人ではなかったので、荷風としては付き合いやすかっただろう。

実務に明るく、荷風はその点で頼りにすることが多かった。荷風を尊敬していて、親身になって老齢単身者の荷風の世話をした。

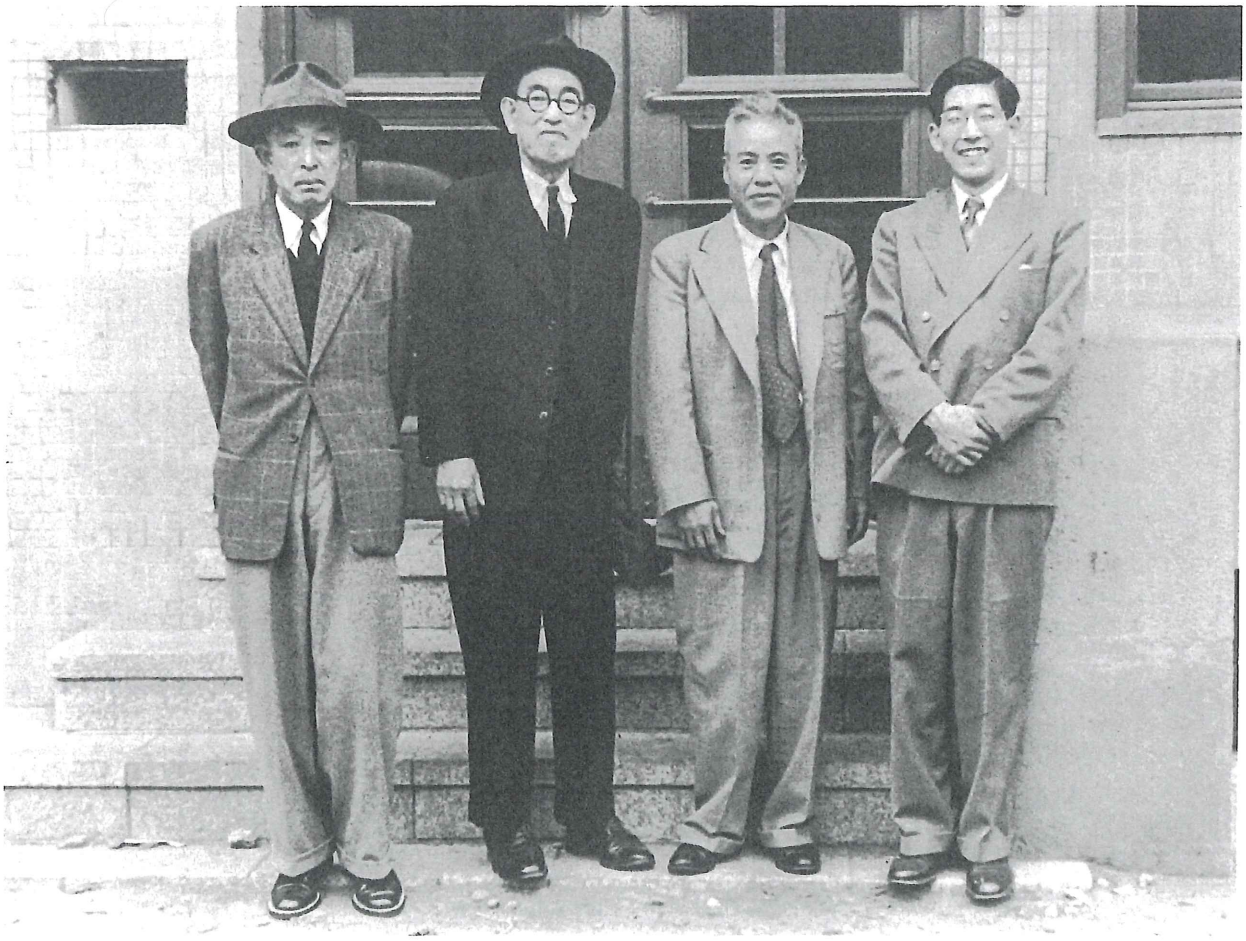
『断腸亭日乗』にはじめて相磯のことが出てくるのは昭和十七年十月十六日。「夜金兵衛の店にて相磯氏より平賀源内作狐や狐蘐と題する写本を借りる」とある。

荷風の行きつけの店、新橋駅近くにあった小料理屋、金兵衛で相磯に会い、江戸時代の平賀源内の書を借りている。

この文章を見ると、このときがはじめてではなく以前から知っていたようだ。相磯は実業界の人だが読書家であり、この日は、おそらく古書店で平賀源内の珍

川本三郎・文

text by Saburo Kawamoto

かわもと さぶろう 作家、評論家。1944年東京生まれ。東京大学法学部卒業。
朝日新聞社記者を経て、映画、文芸、都市論の評論活動に入る。著書に『大正幻影』（サントリー学芸賞）、『荷風と東京』（読売文学賞）、『林芙美子の昭和』（毎日出版文化賞）、『白秋望景』（伊藤整文学賞・評論）、『マイ・バック・ページ ある60年代の物語』『「男はつらいよ」を旅する』『「細雪」とその時代』など。
本連載をまとめた本に『そして、人生はつづく』『ひとり居の記』『台湾、ローカル線、そして荷風』。近著に、池内紀との共著『すごいトシヨリ散歩』。

木村伊兵衛が昭和29年5月19日に撮影した貴重な1枚。
左より相磯凌霜、永井荷風、新井覚太郎、嶋中鵬二。撮影場所は、錦糸町にあった新井鉄工所の本社前（所蔵・アライプロバンス）